

迷子の僕の異世界生活

あたたかくて幸せな異世界で、

過保護な冒険者と出会いました

CHARA CTERS

MAIGO NO
BOKU NO
ISEKAI SEIKATSU

ジェリー

ビートの妹。

素直な性格の少女。

「にーちゃ、ありがと」

マート

宿屋『とまりぎ』の店主。

ビートたちの父親。

「は？ 拾ったって
なに言ってるんだお前」

ソフィア

ギルドの受付の女性。

もともとはかなり強い冒険者だった。

「随分ご執心なのね。
とうとうクラウスにも
春が来たの？」

ビート

迷子になっていた冬夜を

助けた少年。

「ついてこいよ。
なんか食わしてやるからさ」

ヘレナ

ビートたちの母親。

体調を崩して実家に帰っている。

「あんたがどろぼう猫の
『トーヤちゃん』かい？」

ロウ

『とまりぎ』に宿泊する冒険者。

冬夜が大好き。

「おはようトーヤ。
今日も可愛いね」

桜木冬夜

さくらぎふゆや

「あの……本当に迷子なんです。
気づいたらここにいて……」

ある日突然異世界に迷い込んでしまった青年。
保育士を目指しており、
派遣の仕事をして学校に通うお金を貯めていた。
健気でビュアな性格だが、結構大胆で気が強い。

「登録は成人からだ。嘘はバレるぞ？」

クラウス

マデリンを拠点に活動する凄腕の冒険者。
冒険者になる前は王都の騎士団にいたらしく、
ぶっきらぼうだが時折育ちの良さが垣間見える。



ここ何年か、周囲の俺の評価は『動じない』とか『肝が据^すわってる』とかで、悪く言えば『無関心』だ。だけど今のこの状況にはさすがに、生まれてこのかた最大級のパニックに陥^おっていた。

高校を卒業して仕事に就^ついたのが半年前。

同時にそれまでお世話になった児童養護施設を出て、職場から近い安アパートで一人暮らしを始めた。

保育士になりたいという夢があったから大学に進学する同級生が羨ましかったけれど、孤児の俺には金銭的に難しい。だからまずはお金を貯めようと選んだ職場は、新しく学ぶことが多くあり、それなりにやりがいがあった。上司や同僚にも恵まれ大きな不満はなかった。

なにより生まれて初めて、誰にも遠慮する必要のない生活を、心から楽しんでいた——はずだった。

……なんだろう、これ夢かな？ 俺いつ寝たつけ。そんなに疲れてたかな？

いやいやいや、そんなはずはない。だって今日は仕事がお休みで、さっきまでお昼ご飯を作ってた。メニューはなんと唐揚げ！

下味をつけてさあこれからつて時に、肝心の片栗粉を切らしてるのに気づいた。ようやく理想の味に辿り着いた俺の唐揚げに片栗粉は欠かせない。

しばらく悩んだけど変更はありえないと財布を握りしめ外に出た。

——給料も入ったばかりだし、ついでに食後のデザートも奮発しちゃおうかな？

なんて思っても、結局選ぶのはいつもの安価なプリンやシュークリーム。でもそれで充分満たされる。

なにがいいかと考えながら近くのスーパーを目指していたはずなのに……俺、迷子になってる？もうかれこれ一時間くらい歩き回ってるのに、スーパーどころか自分のアパートにも戻れないでいる。

そのうえ今いるのは、見慣れない石造りの橋の上だ。

スマホはうつかり置いてきてしまったから、現在地の確認もできない。

「も〜どこだよここ、うちの近くに川なんてあった？」

記憶にない場所と、これまで耐えていた足の痛みと空腹に氣力をへし折られた俺は、ぼやきながらその場にしゃがみこんだ。

水深が浅いからか、丸い石を敷き詰めたような川底まではつきりと見える。ゆらゆらと揺れる水草を眺めながら、大きな溜め息を一つくと少しだけ気持ちが落ち着いてきて、それまでなんと

く感じていた違和感にようやく目を向けることにした。

ゆっくり辺りを見渡すと、建物も見慣れたものではない。今立っているこの橋もそうだけど、足元のアスファルトはいつからか石畳に変わっていた。

並び立つ家はどれも煉瓦造りで、扉や窓枠なんかは木でできている。たとえるなら、外国の古い街並みにそっくりだ。

たまたまこの通りだけお洒落カフェがいっぱい……なんだろうか。

……うん、違うなコレ。

道行く人はまばらだけれど、服装が少し古くさい。かと思うと髪色はやけに派手な人が多く、中には水色の髪のおじさんもいた。

冷えた頭が再びパニックを起こすと困るので、とりあえずほつたを両手でギュッと摘んでみた。

「——夢なら早く目を覚まさなくちゃ」

う〜ん、普通に痛いなあこれ。

何度もほつたをぎゅうぎゅうつねつてみるけれど景色は変わらず、二度目の大きな溜め息をついた。

迷子になるにしてもほどがあるよね。

この状況はいわゆる異世界転移というやつなんだろうか。図書館や友人に借りて読んだファンタジー小説にこんな展開があった気がする。

平凡な主人公がある日突然違う世界に来て、特別な力を手に入れる。始まるのは剣と魔法で切り

拓く夢と冒険の物語。

自分とかけ離れた世界がすごく面白かった。

でも、なんか違うな。

だって俺はトラックにも轢かれてないし、通り魔に襲われてもない。

神殿や宮殿に召喚されてもないし、『神様』らしき声も聞いていない。

物語の始まりはいつだって、そういうドラマチックなものじゃないの？

安アパートを出て路地を曲がったらいつの間にか異世界に来ちゃった、なんてさすがに地味すぎない？

でもそういうところ、すごく『俺らしい』。

そろそろこれが現実だと受け入れるべきなんだろう。それともそのうちにまた、ふらっと安アパートに戻るんだろうか。

ちよつとそこまで、の予定だったから今の俺はとても軽装だ。ファストファッションブランドで買った薄手の白いシャツに黒のスニーカーパンツ。それにキャンバス地の黒色のスニーカー。

ポケットの中にあるのは少しばかりのお金が入った財布とアパートの鍵、ハンカチだけ。

—— 交番とか役所みたいところはあるのかな？ すぐに戻れないならなんとかしなくちゃ。

あくでもお腹空いたなあ、今いったい何時くらいなんだろう。片栗粉なんて買いに出なきゃ良かった。でもどうしても唐揚げ食べたかったんだよなあ。

思い出したらますますお腹が空いてきた。

橋の欄干に背中を預けてしゃがみこんだまま、つねりすぎて赤くなっているだろう両頬をむにむにほぐす。

次に起こすべき行動の優先順位が脳内でぐるぐると入れ替わり、なかなか現実と向き合えないままかなりの時間そうしていたんだと思う。

「さっきからなにやってんだお前」

不意に声をかけられて顔を上げると、荷物を胸の前で抱えた小学校高学年くらいの男の子が立っていた。その横には男の子のシャツの裾に掴まって、小さな女の子が隠れるように立っている。

「お前だよ黒いの。ここいらじゃあんま見ない顔だな？ どこから来たんだよ」

「わ、言葉がわかる！ 不思議だなあ」

思わず声に出た。

「なんだそれ、俺のことバカにしてんのかよ」

自分の不用意な言葉で、男の子が不機嫌になったのがわかった。

「違うよ！ ごめんね、僕がちゃんと話せるかわからなかったんだ。あの……実は道に迷っちゃって」

だって怪訝そうに俺を見下ろす彼の瞳や子供らしく短く整えられた髪は紺色で、おおよそ日本人とは思えない。女の子なんてふわふわの茶色い髪にくりつとした緑の瞳で、まるでお人形さんみたいなんだもん。こうして日本語が普通に通じることに違和感が半端ない。

慌てて謝り、かつ簡潔に自分の状況を説明すると、男の子は目を大きく見開いた。

「は!? なんだよ迷子って! お前いくつだよ!」

本当なんだからしょうがないだろ、大きな意味で迷子には違いないんだから。

気安い態度の男の子に親近感が湧いて、心細い気持ちが落ち着いてきたら『ぐうう』と派手にお腹が鳴った。

「……お前腹減ってんのか」

「うん、お昼食べ損なっちゃって」

「金は?」

「……持っていないです」

男の子は目と口をあんぐりあげたまま俺を見る。この顔知ってる、信じられないアホだなんて思ってる顔だ。

一応財布はあるよ、お金もね。だけどそれを使えると思うほどアホでもないんだな。

「しゃーねーな、ついてこいよ。なんか食わしてやるからさ」

男の子は行く先を示すようにくいつと顎をしゃくると歩きだした。女の子も小走りで続く。

突然の申し出にびっくりしたけれど、ここに座り込んでからしばらく道行く人の中で声をかけてくれたのはこの子が初めてで、これを逃したら次はない気がした。「あ、ありがとう!」と慌てて立ち上がり、俺はふたりのあとを追いかけた。

後ろをついて歩いていくと、さっきまで座り込んでいたところから一本裏路地に入る。

ほどなくして男の子は一軒の建物の前で立ち止まると、木の扉を軽く叩いて「ここ俺んち、宿屋

なんだ」と言った。

縦板を並べ、金具で留めたアンティーク調の大きな扉。ふたりに続いて踏み入れたその先は広い厨房だった。そしてすぐにおいしそうな匂いと共に、低い怒鳴り声が聞こえてきた。

「遅せーよ! 買い出しにどんだけかかってんだこんにゃ……ろ……?」

男の子によく似た紺色の髪と紺色の瞳を持つ背の高い男が振り向きざま大声を出し、俺を視界に捉えるなり言葉尻を抑え、困惑した顔で動きを止めた。

もしかしくとも、ふたりのお父さんかな?

「なんだソイツ」

「拾った! 腹減ってるみたいだからなんか食わせてやって」

「は? 拾ったってなに言ってるんだお前」

狼狽える相手にそれ以上の説明をすることなく、男の子は抱えていた荷物を作業台に載せた。その中から卵やらジャガイモやらを取り出しては手馴れた様子で戸棚やかごに並べ、壁にかかっていた小さなエプロンを手に取り、これまた慣れた様子で身につける。

そうしてから戸口で立ち止まったままの俺のところへやってくると「昼間は食堂もやってるんだぜ」と得意げな顔で笑って、俺を女の子と一緒に店内の空いているカウンターの端へ座らせた。小さな彼はそのまま給仕に入った。

案内されたカウンター席から見渡した室内は、白い壁で統一されていてとても清潔感がある。それから柱や梁、窓枠、床なんかは木材が使われて、天井は高く、明るくて温かみがあった。こうい

うのなんていうのかな、北欧カントリー？ お洒落カフェと思っただけは間違ってたかな。

斜め後ろ側は高窓から光が差し込む広いエントランスになっていて、俺が入ってきたのよりさらに大きな観音開きの扉が、開くたびにカランと可愛い音を立てて客を迎え入れていた。その奥は壁があつてどうなっているかはわからないけれど、上の階へ続く階段が半分だけ見えた。

今いる食堂にはカウンターの他に、テーブル席が八つほど並んでいる。昼時だからか人気のお店だからか、ほとんどの席が埋まつていて、客の間を男の子がひとりですわしなく動き回っていた。小さいのによく働くなあ。

「彼はすごいね。キミのお兄ちゃんかな？」

左隣に座る女の子に初めて声をかける。

彼女は俺を見てにこおつと満面の笑みを浮かべて大きく頷くと、緑の瞳をキラキラさせた。

「お兄ちゃん大好きなんだ」

笑顔が可愛くて堪らなくて、養護施設にいた小さい子供たちを思い出してしまふ。

「ほらよ、にいちちゃん」

思わずほつこりしてたら、俺たちの目の前にお皿が置かれた。

女の子もお腹が空いていたのか、すぐにスプーンを手に取り食べ始める。その姿に思わず唾を飲み込んだ。俺のお腹の減り具合はとくに限界を超えていて、まさにお腹と背中がくつつきそうなんだけど、さすがに言わなくてはいけないことがある。

「あの！ ……僕、お金持っていないんです……けど……」

すると「ああん？」と言いながら彼の父親らしき料理人が近づいてきた。

「にいちちゃん、それはダメだ」

「ですよね」

「違うぜ。うちの倅が食わせてやれつて言つてんだ。黙つて食つて、あいつの『男』を立ててやつてくれ」

そう言つて、バチンとウインクをかました。

「そういうもんですか？」

「ああ、そういうもんだ」

なんだか格好いい。

「それじゃあ、ありがたくいただきます」

良かった、これで安心して食べられる！

両手を合わせていただきますをして、出された料理に手を伸ばす。

大きな器に入っているのはポトフみたい。透き通った黄金色のスープに大きなお肉と野菜がゴロゴロ入つていてすごくいい香りがする。

「おいしいー」

スープの味はもちろんのこと、お肉を噛み締めた途端に旨味が口いっぱいに広がって、あまりのおいしさに思わず声が出た。

「でしょー」と隣の女の子が声を上げる。得意げな笑顔が可愛い。

次にかごに盛られたパンを手を取った。一切れにしては大きいので半分にしようと試みたけど……どうしよう、思ったより硬い。このままかじるべきかな？ それとも頑張って引き千切ってみる？

食べ方に迷っていると小さな手がかごに伸びて同じくパンを一切れ掴むと、そのままスープに浸した。

「こうするんだよ」

「そうなんだ、教えてくれてありがとう」

行儀が悪いかなと思っただけど、いいんだな。

お手本に倣いスープにくぐらせたパンを口に運ぶと、あれほど硬かったパンは口の中で含んだスープと一緒にじゅわりと溶けていった。空きつ腹の体に染み渡る。

節約のために自炊ばかりだったんだけど、久しぶりに食べた『誰か』の作ったご飯はとっても温かくて優しくて、今置かれている状況をすっかり忘れて、俺は一食分には多すぎるその量を夢中で口に運んだのだった。

「ごちそうさまでした」

満たされた。満たされすぎてお腹がパンパンで苦しい……

「腹は膨れたか？」

少し店内が落ち着いてきたところで、小さな彼が俺の右隣に腰かけた。

「ごちそうさま、すごくおいしかったよ。ほら見て？」

膨らんだお腹を擦って見せると女の子と良く似た顔で満足気に笑う。

「助けてくれてありがとう。今さただけど名前を教えてもらってもいいかな？ ちなみに僕の名前は『冬夜』と言います」

「俺はビートだ」

「改めてありがとうビート。おかげでお腹いっぱいになりました」

「そうかよ」

ビートは鼻の下を人差し指で擦りながら、照れ臭そうに目を逸らした。

「彼女も紹介してもらえますか？」

「そいつは俺の妹のジェリーだ」

「ジェリーもありがとう」

左隣に座る女の子——ジェリーに向き直りこちらにもお礼を言うと、彼女はにへっと笑って両手を差し出した。

誘われるままに小さな手をそっと下から握ると、そのまま俺の手を支えにして椅子の上に立ち上がり、俺の膝の上に移って腕の中にすっぽりと収まった。

……なにこれ可愛すぎる。

俺の育った養護施設の隣には同じく俺の育った乳児院があった。暇を持て余した時や人手の足りない時とかによくチビたちの面倒を見ていたから、子供の扱いにはわりと慣れているほうだと思っ

……とそこまで思ってたハツとする。

俺は得体の知れない無銭飲食の怪しげな男。そしてたぶん目の前の料理人はこの子らの父親。怪しい男が自分の愛娘を膝に乗せているこの状況。持ち合わせている常識では……うん、通報されちゃうね。

なんてことを考えながら恐る恐る視線を上げると、予想に反して料理人が申し訳なさそうな顔で口を開いた。

「すまんなにいちゃん、俺はソイツらの父親でマートって言うんだが、実は嫁が体調を崩して昨日から実家に帰っちまってなあ。突然のことだったから朝からずつと構ってやれなかったんだ」

マートの優しい視線の先にいるジェリーは、俺の腕の中でもぞと体の位置を変えているうちに平らな胸に顔を埋めて落ち着いた。その背中をトントンと叩いてやると、すぐに寝息を立て始めた。お昼寝の時間なのかな？

「改めまして僕は冬夜です。ご飯ごちそうさまでした、すごくおいしかったです。それで奥様の追加減はいかがですか？」

自己紹介をしたあとにお礼を言うと、マートは破顔した。

「ああ、心配ありがとよ。実は三人目が腹にいるんだが、宿屋と食堂の仕事で少し無理しちまってな。あいつは『大丈夫』って言ったんだが俺が無理やり実家へ帰したのさ」

照れながらそう答える彼の優しい笑顔には、家族を思う気持ちがあふれていた。

「いい旦那さんですね。ビートにも助けてもらいましたし、ジェリーもおりこうさんで素敵なご家

族です」

「なあにこれくらい大したことないさ、困った時はお互い様ってな。ビートも買い出しありがとな、ほら。お前も今のうちに昼飯食え」

ビートの前にさっき俺が食べたのと同じものが同じ量で出てきた。まさかと思っていると、ビートはあつという間に平らげた……マジですか。

そうこうしてるうちに客はいなくなり、お店を一旦閉める時間になった。

「重かっただろう、ありがとな」

「いえ……」

そうでもないと言いたかったけど、情けないことに太腿のあたりがなんとなく痺れている。

マートがジェリーを寝かせに行った間に、俺はビートを手伝ってテーブル席に残ったままのお皿を片づけたり、テーブルを拭いたりして、マートが戻ってきたら一緒に洗い物もさせてもらった。片づけがすべて終わると、マートがほんのりと果物の味のついたお水を出してくれた。

彼は飲み物を手に厨房から出ると、俺とビートをテーブル席へ誘い、並んで座った俺たちの向かいに座る。そして「さてと」と呟きながらビートと同じ紺色の瞳で俺を上から下まで観察すると口を開いた。

「トーヤだったか？ 身綺麗な格好にしては金もなく腹を減らしていた……一体お前は何者だ？」その顔つきはさっきまでの優しい父親でも気のいい料理人でもない。疑いに向けて大人の目だ。どう答えればいいのかわからないまま固まっていると、ビートがあっけらかんと言いつつ放った。

「そいつ、迷子なんだってさ」

「はあ？　なんだよ迷子って。一体いくつだトーヤ」

噎^むせながらマートが呆れたように眉根を寄せる。

うん、この顔このセリフ、先程そのままビートからもいただきました。すごいな親子って、こんなに似るんだ。ほらなって顔しないでよ、ビート。

でもおかげで張り詰めた空気はすっかり和^{やわ}らいでいた。

「あの……本当に迷子なんです。気づいたらここにいる、どうやって家に帰るかもわからなくて。途方に暮れて橋でしゃがみこんでいたら、ビートが声をかけてくれました」

自分でも信じがたいことだけどそれが事実で、今の俺にわかるすべてだ。

「あ、ちなみに年齢は十八歳です」

何度も聞かれるから。果実水をひと口飲んでからつけ加える。するとマートとビートがテーブルにバンツと手をつけて立ち上がり、寸分違^{ちが}わず同時に叫んだ。

「はあ!?　十八!?　どう見ても十四か十五だろうが!!」

「は？　なに基準だよそれ！」

思わず俺も立ち上がりはたと気づいた。

マートは背がでかい。おかしいな、俺の身長は百七十センチあるはずで、日本人ならそれほど低いほうではないはずだ。だけどマートはそんな俺を余裕で見下ろしている。

見上げるほどだから、たぶん百九十センチくらい？　もしかしたらもつとあるかもしれない。そ

れに加えて太い首と広い肩幅、そして分厚い胸板は、白いコックコートを着ていなければ格闘家と間違えそうなほどの立派な体格だ。日本でこんな大きな人見たことない、どれだけ背伸びしても完敗だ。

あまりの体格差にちよつぷり傷ついた俺は、伏し目がちに口を尖^{とが}らせながらがつくりと椅子に座り直した。

「そりゃ……マートさんよりは低いかもしれないけど、ちゃんと十八歳です。ちよつと自分より低いからって酷いです」

「すまん、その……この辺りではトーヤみたいのは見なくてな」

「十八だつて拗^すねといて、そのくせ迷子って笑えるな」

俺の落ちこみようにマートが意味のないフォローをいれてくれたけど、ビートがそう言つて俺を小馬鹿にしたから台無しだ。

くっ……ビートめ！　でもキミは俺の恩人だ。しかも子供だから怒れない。

「その……なんだ。年齢はともかくとして、本当の本当にただの迷子か？　……例えばどこから攫^{さら}われてきたとか、そういったことはないのか？」

気がついたら知らないところにいたんだから、ある意味攫^{さら}われたと言つてもいいような気はする。けれどマートが言いたいこととはたぶん違うよな。

「本当の本当にただの迷子です。こちらでご飯を食べさせていただいて本当に助かりました」

もう一度深々と頭を下げて言葉が続ける。

「あの、あと迷惑かけついでで申し訳ないんですが、僕みたいな迷子が働けるところを教えてくださいませんか？ もしくはこの世界でのお金の稼ぎ方……例えば働きながら寝泊まりできるところなんかを教えてくださいませんか？ 紹介してもらえないでしょうか」

どうしてこの世界に迷い込んだのがわからないから、どうしたら元いた場所に戻るかもわからない。それならひとまず割り切って、この世界で生きる術すべを手に入れないといけない。

マートは腕を組みじつと考え込んでいた。

食事を食べさせてもらったうえに頼み事だなんて、ちょっと図々しかっただろうか。でも今頼れるのはマートしかない。

祈るような気持ちで返事を待っていると、ビートが紺色の瞳をキラキラさせながらテーブルに身を乗り出した。

「だったらトーヤ、ウチを手伝ってくれよ！ 今かーちゃんいなくて大変なんだ。な、いいだろうとーちゃん、部屋だつて空いてんだしさ！」

ビートはなんていい子なんだ！ マートもいい人そうだし、確かにここで働けたらものすごく助かる。

「でもなあ……」

「とーちゃんいつも『拾ったら最後まで面倒見る』つて言うじゃんか。トーヤのさっきの昼飯代だつて俺が働いて返すし、ちゃんと仕事が見つかるまで俺が面倒見るよ。なあいいだろ？」

……おいビート感動を返せ。俺は犬や猫じゃないぞ。

マートは俺とビートをうーんと唸うなりながらしばらく交互に見つめると、ようやく口を開いた。

「なあトーヤ、お前本当に十八なんだよな？」

「はい、本当に十八です」

「そうさな、嫁がないのは結構な痛手だ。まだたつた半日だけが俺ひとりでは宿屋の仕事で一杯で、ジェリーの世話はビートに任せきりだ。そのうえ店の手伝いもビートに頼っちまって情けない父親さ」

マートはゆるゆると首を横に振り、溜め息をつく。

「正直明日からしばらく食堂を閉めようかと思つてたんだが、そこにお前さんが現れた。さつき片づけを手伝ってくれたのを見たところ仕事はすぐに任せられそうだし、トーヤさえ良ければ少しの間この店を手伝ってくれたら助かる。……だがな」

いいんですかそんなおいしい話と思つていたが、不穏な空気。やっぱりダメ？

「トーヤはギルドつてわかるか？」

「わかりません」

でもたぶんあれかな？ ラノベでよく出てくるやつ。

「この辺りにはギルドつていう……なんだ、仕事を斡旋あつせんするところがあつて、トラブルがあつた時のために仕事はギルドを通さないとイケねえんだ。俺は直接お前を雇やとえない。わかるか？」

要するに日本で言うところの職業安定所、もしくは派遣会社の総括みたいなものと推測し、こくりと頷く。

「お前が本当に十八で成人してるなら、ギルドに登録ができて俺からの依頼を受けられる。どうだ？ やってくれるか？」

「いいんですか!？」

「宿屋の仕事と昼の食堂の仕事だ。期間は嫁が戻るまでの十日くらい。報酬は寝る場所と朝昼晩の飯ぐらいだが、それでもいいか？」

高いのか安いのかわからないが、今の俺には破格の条件だ。俺は差し出されたマートの手を両手で握った。

「ありがとうございます！ よろしくお願いします！」

「良かったな、トーヤ」

嬉しくて、ニヤリと笑うビートを思わず抱きしめる。

「ありがとうビートのおかげだよ！」

「わ、ちょっとやめろよ！ ガキじゃねーんだから！」

「本当だよ、ビートがいなかったら僕はまだ橋のところでしゃがんだままだったんだから」

もう一度ぎゅうつと抱きしめて、顔を赤くするビートの柔らかいほっぺたにちゅうをした。あ、しまったやりすぎた。

「な、なにすんだトーヤ！」

「ごめん、嬉しくてつい……」

本当は可愛かったからって言ったら怒るかな？ だって俺に対する気安い口のきき方や態度が、

すっかり養護施設の子供たちに重なっちゃったんだ。

「トーヤだってチビのくせに子供扱いすんな」

そう言っつて、ビートはほっぺたを擦りながらそっぽを向いてしまった。耳が赤いから照れてるだけかな。あんまり嫌がる様子はないからまあいいか。

それにしてもコイツ、今俺のことチビって言いやがった。

「そう言うビートはいくつなんだよ」

「俺は七歳だ！」

「そ……そうなんだ。大きいね」

「べつに、このくらい普通だけど」

これが七歳の普通？

なにを食べたらこんなに大きくなるのかな？ 普通って言うけどビートの背丈、百四十センチ近くあるんですけど。マートも大きいから遺伝ってやつかな？ お店の手伝いもしっかりしてたし、てつきり小学五年生くらいだと思ってた。でも七歳なら子供扱いで全然いいじゃん。

「それじゃあ話も決まったことだし、今からギルドに行つて契約してほしい。が、俺は宿の準備をしなくちゃいけねえからギルドには連れてつてやれねえ。ビート、今日はクラスがいるから、ちょっと呼んできてくれ」

「えー！ ギルドなら俺が連れてくよ」

「人手が足りないからトーヤを雇うつてのに、なに言つてんだ。お前は俺と宿の仕事。トーヤ、ク

ラウスっていうことを常宿にしてくれてるヤツにギルドに連れてくよう頼む。いいヤツだから安心してくれ。ほら、早くクラウス呼んでこい」

マートに指示されて、ビートが渋々階段を上がる。どうやら二階が宿になっているみたいだ。

ビートには悪いけれど、右も左もわからない場所に行くのだから、大人の案内があったほうが正直ありがたい。

「なにからなにまでありがとうございます」

「いいさ、トーヤが手伝ってくれたら俺も助かる。ギルドへの依頼も用意するから、登録が済んだらすぐに仕事だ。よろしくな」

「はい！」

なんだよ順調じゃん俺。よし、十日間このお店を手伝って、その間に就活も頑張るぞ。

「あくもう、ちゃんと服着ろってば！ クラウス！」

心の中でガッツポーズを決めていると、ビートの声と上の階をバタバタと走る足音が聞こえた。音のする方向に目をやると、階段を降りてくる長い脚が見えた。

ビートより先に階段を降りてきたのは男の人だった。

スラリとした長身が印象的なその姿は黒いロングパンツを穿^はいただけ。けどなにより目を引いたのは惜しげもなく晒^{さら}した上半身だ。ひと目で鍛えあげられたとわかる胸板に、見事に割れた腹筋。長い二の腕も布地に隠れた太腿も逞しく、無駄なものが一つもないほど引き締まっていた。

これに憧れない男はいないだろうと思う体^{たい}躯^くに加え、肩より長く伸びた金髪は、吹き抜けの窓か



ら差し込む陽の光を浴びて動くたびにキラキラと輝いている。

あくびをしながら片手で無造作にその金髪をかき上げると驚くほど整った顔立ちが現れ、こちらを見る切れ長の目からは空を映したような蒼色の瞳が覗いていた。

まるで映画のワンシーンみたいなシチュエーションで登場したこれまで見たことのないほどのイケメンに、しばらく見惚^{みと}れてしまった。

「ほら。シャツ取ってきたから早く着ろよ」

遅れて降りてきたビートが投げつけるように渡したシャツを無言で受け取ると、男は渋々袖を通してながらマートに声をかけた。

「なんだよマート、せっかく寝てたのに」

「悪いな、ちよつと頼まれてほしいことがあるんだ。ソイツはトーヤっていうんだが、ウチの手伝いを頼むことになってな。仕事を受けるのがどうも初めてなようだから、今からギルドへ連れてって登録してきてほしいんだ」

「なんで俺が」

「わかるだろ？ トーヤを連れてくのにビートじゃちよつとな。知つての通り俺も手が離せねえ。頼むよ、な？ 夕飯つけるからさ」

そのイケメン——クラウスは、俺をチラリと見るとすぐに視線をマートに戻す。

「登録は成人からだ。知ってるだろう」

「そんなことは言われなくてもわかつてる。大丈夫だ、こう見えて十八歳だよ」

その言葉を聞くなりクラウスは俺に近づくと、今度は頭からつま先までじっくり見つめた。

それにしてもクラウスもすごく大きくて、マートよりさらに身長が高い。もしかしなくても二メートルは余裕で越えてるんじゃないのかな？

「登録時に嘘はバレルぞ？」

そう思っていると、クラウスがマートに視線を戻してそんなことを言い放った。ビートがニヤニヤ笑ってる。コイツめ、覚えてろ！ それからこの失礼な男をイケメンと思った俺のバカ。

——でも、この世界で生きるためにはこのくらい乗り越えなきゃ。

「はじめまして、僕は冬夜と言います。こう見えて間違はなく十八歳なので大丈夫です。お休みのところ申し訳ありませんがギルドまで連れていってください。よろしくお願いします」

値踏みされる視線なんてこれまで何度も向けられたことがあって、今じゃ慣れっこだ。内なる不満を抑えつけ、身についた得意のイイ子ちゃんスマイルで挨拶してやった。

クラウスは俺をしばらく凝視したのち、悪口としか思えないことを言い出しやがった。

「こんな小さいのになにを依頼するんだ？」

小さい言うな！ 俺は普通だ、あんたがデカすぎるんだよ！

なんて気持ちはこれっぽっちも表に出さず、にこにこ笑っておく。

「言つたる？ ヘレナがいない間の手伝いを頼もうと思つて。あ、ついでに依頼の届けもクラウスに頼んでいいか？」

クラウスは面倒くさそうに溜め息をつく、「わかった、準備してくる」と言つて部屋へ戻って

いった。

「格好いいだろクラウド。冒険者やってんだけど、とーちゃんの『昔なじみ』？　ってヤツらしくてさ、ウチを常宿にしてくれてるんだ。すげえ強えんだって！」

「ふ〜ん」

『冒険者』。なんとも異世界チックな響きだ。常宿ってことはいわゆるホテル暮らしってやつ？ お金持ちなんだあ。

「冒険者になる前は王都の騎士団にいたってとーちゃんが言ってた。剣術大会で優勝したこともあるんだってさ」

ビートが聞いてもないクラウドの個人情報を教えてくれる。大きな瞳を輝かせて話すビートは、クラウドのことを自慢に思っているようだった。

俺に対する態度はともかくとして、イケメンで、スタイル抜群で、そのうえ強いなんてなんとも羨ましい。そんなクラウドはすぐに降りてきたが、さっきのラフな格好から印象がガラリと変わっていた。

足元は膝丈まであるロングブーツ、上は腰のあたりでベルトを締めたロングコート。飾り気のない黒一色の衣装を着こなし、ファッションモデルさながらの男ぶりで降りてきた。

ビートが懂れる気持ちがわかる気がする、なんかもう格好よさの次元が違うよ。

「じゃあ行くか」

出入り口の前にいるクラウドに近づくと、彼のなにか言いたげな視線に気づく。

ん？　なんだろ？　もしかして挨拶とか大事にするタイプかな？

「よろしく願います、クラウドさ、ん？」

合ってるかな？　いや、やっぱり違うかも。もしかして勝手に名前呼んだから怒った？

「お前、今からギルドに行くのにその格好なんかならないか？」

……ギルドに行くのに服装が大事なんだ。でも無理だし。

「僕これしか持ってます……ダメでしょうか？」

このシンプルな白い長袖のシャツに黒のスキニー、安価なものではあるけれど特別変な格好ではないと思う。元の世界は秋晴れで、日中はまだ少し日射しが暑い時期。そんな日の近所への買い物なんだから、上着は一枚も持っていない。

「悪くはないが、良くもないな」

クラウドはそう言うと、腰のベルトにつけていた小さなバッグから、大きな黒い布を一枚取り出した。

「わわっ！　すごい！」

出てきた物の大きさがバッグの容量に対して明らかにおかしい。もしかしてマジックバッグってやつ？

「とりあえず今日はこれを着ておけ」

思いがけない異世界名物の登場にはしゃいだ俺をクラウドは気にもせず、取り出した黒い布をふわりと被せた。足元ですっぽり収まるほど大きな、フードのついたマントだった。

「ありがとうございます」

丁寧に合わせて目のリボンまで結んでくれるクラウスを見上げてお礼を言うと、無言のまま仕上げとばかりにフードを目深に被せられてしまった。

「じゃあ行ってくる」

「おう頼むな。で、早く戻ってくれな」

そうして、マートが手をヒラヒラ振って見送ってくれた。

この世界に来て歩いたのは、橋からマートの宿屋までしかない。だからギルドまでの道は物珍しくてついキョロキョロしてしまう。

見える範囲のどの建物も煉瓦や木を使って建てられてるようだし、道路は白っぽい煉瓦を使って丁寧舗装されている。

やっぱり日本というより外国の街並みに近いかな。高層ビル立ち並ぶ日本の大都市に比べたら、こっちのほうが親しみが持てる気がする。知らない場所だけど。

お店と思われる建物には看板がかかっているけれど、書かれている文字はアルファベットに似ているようで違っていてもまったく読めなかった。言葉は通じるのに変なの。

クラウスの背中を追いつつしばらくすると、車が見当たらないのに気がついた。まあでもたまたまかもしれない。もしかしたら石畳は乗り入れ禁止とかね。

そんなことを考えていると、周りの建物の何倍も大きく、ひととき立派な赤い煉瓦の建物が見え

てきた。その建物の真ん中にトンネルのような大きな半円のアーチがあった。

そこでクラウスの足が止まった。どうやらここが『ギルド』らしい。

マートのお店からここまで、体感的に十五分くらいかな。ただその間、脚の長いクラウスとのリーチ差で、俺はずっと軽いランニング状態だった。普通に歩いたらもう少しかかりそうだ。

少し息が上がったけれど汗はかいていない。というか、むしろ熱をもった体が強制的に冷やされている感じがする。なんでだろ。

クラウスに続いて階段アプローチを上がり大きなアーチの入口をくぐる。トンネルのようだと思つたそこには、内側に観音開きになった分厚い鉄の扉がちゃんとあった。

ギルドの中は、天井の高い広いホールになっていた。まだ真昼だというのに差し込む光はなく、照明によって明るさを保っているけれど少し薄暗く感じた。

左手にはテーブルを囲んで話しているグループがいくつかあって、その中のひとりが俺たちに気づいて立ち上がりクラウスに声をかけてきた。

「ようクラウス、今日は来ねえんじゃないか？」

気安い感じでクラウスと肩を組んだ男は、目が覚めるような赤色の髪をしていた。

……派手な人だなあ。鮮やかすぎて目がチカチカする。見慣れない髪色だけど不自然ではなかった。服の上からでもわかるガツチリとした体に薄い金属の防具をつけてるから、この人も冒険者なのかな。

『とまりぎ』のマートに頼まれてちょっとな。悪いが急いでるから話はまたにしてくれ」

愛想なくクラウスがそう言うのと、相手もそうかと言ってすぐに他の人と話し始めた。

——マートの宿屋の名前『とまりぎ』って言うんだ。戻ったら看板見てみよう。

クラウスに促されて奥に進むと、役所のような窓口がいくつか並んでいた。

「あらクラウス、こんな時間になにかしら？ 昨日遅かったから今日は仕事しないのかと思ってたわ」

『『とまりぎ』のマートに頼まれて仕事の依頼書を持ってきた。あとその仕事をコイツに受けさせたいから登録も頼む』

「あら、新規登録なの？ わかったわ。あ、依頼は隣のカウンターでお願いね。ちよつと〜誰か来てくれない？ 依頼受付お願い〜」

明るいう声と良く似合うピンクの髪をきれいにカールさせた、薄い水色の瞳のちよつぷり派手すぎく美人なお姉さん。なにげに俺より背が高い。

奥のほうへ声をかけて俺に椅子に座るよう示すと、お姉さんもカウンターを挟んだ向かい側に同じく座った。制服で抑えきれない見事な胸が目の前だ。刺激が強すぎるよお姉さん。

「ギルドへようこそ。今から登録するから悪いけどそのフード脱いでくれるかしら。認識障害の魔法がかかって、そのままじゃあなたがちゃんと見えないの」

手に持ったペン先で自分の目元を軽く叩いてそう言う。

「魔法!？」

クラウスのバッグでもしかしてと思ったけど、やっぱり魔法のある世界なんだ。

思わず大きな声で反応してしまった俺を気にもせず、お姉さんが続ける。

「そうよ、それ迷宮品かしら？ 登録するのにあなたの顔を見ないわけにはいかないから、フードを取ってちょうだい」

俺は慌ててフードを脱いだ。どうりでお姉さんの視線が俺の目を捉えなかったわけだ。

「あら、随分と可愛らしいわね。じゃあとりあえずこれ書いてくれるかしら」

お姉さんは見るからに営業スマイルとわかる笑顔を浮かべながら、ゴージャスなネイルのついた指先でペンと紙を俺の前に滑らせた。でもダメだ、やっぱり読めない。

「あの……すみません、文字が読めないんです。それだと登録できませんか？」

お姉さんは少し驚いたみたいで目をぱちぱちさせたけど、すぐに完璧な営業スマイルに戻る。

「いいえ大丈夫よ。じゃあ私が聞くから答えてもらえるかしら」

「はい、よろしく願います」

良かった、読めなくても大丈夫なんだ。この世界には文字を読み書きできない人が結構いるのかな？ 勉強すれば俺も読めるようになるだろうか。

「じゃあいつもは記入したあとにやることなだけど……」

用紙とペンをしまったお姉さんは、拳ほどの大きさの水晶のような物を机の上に置いたかと思ったら、今度は小さなナイフを差し出した。

「これに血を垂らしてもらえるかしら」

「え……」

血？ 意味がわからなくて、思わず隣のクラウスを見る。

「その水晶に血を垂らすと、お前の必要最低限の情報がわかる。名前、年齢、それから犯罪歴。嘘はつけないって言ったろ？」

ほら見る、つて感じでクラウスが口の端を上げた。

「違う、あの……そうじゃなくてその……自分で切るなんて怖くてできません」

そんなの無理に決まってる。うっかりで指を傷つけることはあっても、わざと切るなんてやったことがない。加減もわからないのに血が出るまで切るだなんて、痛いに決まってる。

……ほんとに怖いんだから、ふたりして『なに言ってるのこいつ』みたいな顔はしないでほしい。

「あの……針、針はないですか？ それならなんとかできると思います！ ……怖いけど」

なんとか思いついた代替案を必死に訴えると、不意にクラウスが俺の手を取った。

俺がそれを認識した時には、すでに小指から赤い血がひとしずく垂れていた。

「痛いかな？」

「だい、じょうぶ……です」

痛みはもちろん傷口もよく見ないとわからない。あまりの早業はやわざで手品みたいだ。

「ふつ良かったわね。じゃあその血をここに垂らしてくれる？」

言われた通りに水晶に血を垂らすと、水晶が優しく白く輝き、同時にお姉さんの手元にあるガラスのような透明のタブレットに文字らしきものが浮かんだ。

タブレットに浮かび上がる文字を見ながら、お姉さんが俺に質問を始めた。

「名前は？」

「冬夜です」

「年齢は？」

「十八です」

「出身地は」

「わかりません」

「スキルは？」

「わかりません」

「魔法はどうかしら」

「わかりません」

「犯罪歴は？」

「ないと思います」

答えるたびに水晶がほのかに光って綺麗だった。

怪しまれないように簡潔に答えたけれど大丈夫だったかな？ 確信を持って答えられたのは、名前と年齢と犯罪歴だけ。

ちらりとお姉さんを見ると、困った顔をしていた。

「クラウス、この子どうしたの？」

「知らん。俺が起きた時にはマートの宿屋にいたんだ。なんだ、登録できないのか」

「うゝん、とりあえず成人してるのは確かだし、犯罪歴もないから最低条件はクリアよ。トウヤ、他の質問をしてもいいかしら？」

「はい」

あ、お姉さん『トウヤ』って呼んでくれた。

「最初の質問ね、名前はトウヤでいいの？」

「はい」

「ここにあなたの情報が出てるのがわかるかしら」

お姉さんはそう言って透明なタブレットを見せてくれたけれど、やっぱりほとんど読めなかった。

「ごめんなさい、読めません」

「いいのいいの。じゃあ……あなたの名前なんだけど、あなた家名を持っているわよね？ これは登録せずに、『トウヤ』だけで登録していいのかしら？」

「はい」

「了解。それとあなたの出身地なんだけど……一応文字は書いてあるけど読めないの。理由はわかるかしら？」

「僕にもわかりません」

「そっかあ……うゝゝん」

質問のたびにお姉さんの顔から笑顔が消え、眉間のシワが徐々に深くなる。

「ギルドとしてはトラブルを避けたいの。あなたにとって話したくないことがあるかもしれないけ

れど、もう少し質問してもいいかしら」

「大丈夫です。ギルドに登録して働かないといけないので」

そう答えると、お姉さんは意を決した顔で周りを気にしながら小声で問いかけた。

「じゃあ聞くわね。もしかしてあなたは、誘拐された挙げ句知らないところで放り出されて、帰りがわからない貴族のご子息だったりする？」

「——ただの迷子です」

一瞬お姉さんがふざけてるのかと思ったけれど、至極真面目な表情だ。そういえばマートにも似たようなことを聞かれた気がする。

「本当に？」

「本当です」

「……やっぱり嘘は言っていないのよね」

溜め息交じりに水晶をチラリと見た。なにそれ、嘘発見器ですか!?

「いいならさっさと登録してマートの依頼を受けさせてくれ。そいつが戻らないと店の仕事が回らないらしい」

「……わかったわ、じゃあ登録するわよ」

お姉さんは釈然としないながらも、クラウスが急^せかすような物言いをするのでしかたなさそうに水晶に手をかざした。水晶が瞬くように光を放ったかと思うと、お姉さんの手の上に小さな金属のプレートが現れた。

「これがギルドタグよ。これを持っていればトウヤが成人してることや犯罪歴がないことがわかるの。どこでも通用する身分証明書だから失くさないでね」

説明しながら、プレートに革紐をつけて俺の首にかけてくれた。手に取り眺めてみる。長さは三センチ、幅一センチ程の小さな銀色のプレートに刻まれた模様のような小さな文字はやっぱり読めなかった。

「急ぎのようだから今日はこれで終わりにするけど、しばらくは『とまりぎ』の仕事よね？ ギルドの細かな説明は次の仕事を探す時に改めてしてあげるわ。それじゃあ頑張ってね」

綺麗な人から笑いかけられるなんて経験、あまりないからドキドキしちゃう。お礼を言った時の俺の顔は、きつと赤いはず。だけどお礼を言い終わる前にクラウスにフードを目深に被せられたから、誰にも見られずに済んだと思う。

無事終わって安心したのも束の間、「ちゃんとして来いよ」と踵^{きびす}を返してスタスタと歩き出したクラウスに、遅れるまいと俺は慌てて彼の背中を追った。

『とまりぎ』からギルドまでほぼ一本道だったから、ひとりで行くことになっても迷う心配はなさそう。

登録の時に気になったことをいくつかクラウスに聞いてみたかったけど、どうしたって周りの様子が気になるし、なにより行く時と同じでクラウスの広い歩幅についていくのに精一杯で、質問する余裕がなかった。

「いたっ！」

突然、顔面に衝撃が走る。よそ見をしながら小走りしていたせいで、突然立ち止まったクラウスの背中に勢い余ってぶつかってしまったみたいだ。

「大丈夫か？」

「はい、あの……ごめんなひゃい」

ぶつけた鼻を擦りながら返事をしたら、変な言い方になってしまった。

そんな俺に呆れたのか、クラウスは溜め息をついて再び歩き出した。でも今度はゆっくりと。

——俺が駆け足だったの、気づいてくれたのかな。

終始ぶつきらぼうな態度だった彼の心遣いが嬉しかった。

でも小走りが早歩きになったくらいなので、せっかくならもうちよつとゆっくり歩いてほしいかも。

だけどそんな考えは、長い脚を持て余すようなクラウスの歩き方を見たら申し訳ない気持ちに変わった。そして、身長差があるからしかたないとはいえ、自分の脚の短さが恥ずかしくなった。

クラウスのおかげでさっきよりは息が整ってる。せっかくだからギルドでのことをなにか聞いてみようか。だけどそれが常識的なこととしたら、クラウスに変に思われちゃうかな。たとえばこの不思議なマントのこととか。

結局、ひと言も話すことなく、俺たちは『とまりぎ』へ戻ってきた。

入り口は出た時と同じ表に面したほうだった。ビートが案内してくれた扉に向かうのだと勝手に

思ってたけど、そっか、クラウドはお客さんだからか。

自分がこの先使うべき扉を認識しつつ、クラウドに続いて『とまりぎ』の扉を抜けるなり、ジェリーの泣き叫ぶ声が鼓膜を大きく震わせた。

「うわああああん！ とーちやいやああ!! かーちゃ！ かーちゃああ!!」

マートが抱き上げてなんとかだめようとしているけれど、ジェリーは顔を真っ赤にして泣き叫び、腕の中でのけぞって全身でイヤイヤしている。

ひよっとして寝起きが悪かったのかな？

「なく、もう泣きやめよ、とーちゃん仕事できないだろー」

ビートはジェリーを見上げながら困り果てた顔でそう言うが、ジェリーはさらに泣き喚き、完全に逆効果になっていた。

久しぶりに聞く小さな子供の泣き声についてほっこりしちゃったけど、ふとクラウドを見ると綺麗な顔をしかめながら両手で耳を塞いでいた。

うん、わかる。子供の泣き声って超音波だよな。

「クラウド帰ったのか！ トーヤはどうした？ まさか置いてきたのか!」

ようやく俺たちに気づいたマートが焦り気味に声を上げた。……あれ？ 俺ここにいますけど？

「おい、そのマントを脱げ」

「え？ あ、はい。ありがとうございます」

慌ててマントを脱いで、手早く畳んでクラウドに渡す。

「あーいたいた！ どうだ、仕事できるか？」

すぐにマートと目が合った。クラウドの隣にいたのにマントを脱ぐまで本当に気づかなかったみたいだ。認識阻害のマントだっけ、面白いな。

「はい、無事登録できました。とりあえずなにから始めたらいいですかね？」

「できることならジェリーを泣き止ませてほしいんだが……そうだな、裏に干したシーツを取りこんでくれるか？ その間に次の仕事を考えておくから」

「わかりました」

そんなことなら簡単だ。

俺はマートに近づくと泣き叫ぶジェリーの耳朶をはむつと咥えた。するとジェリーは驚いたように目を見開き、ハタと泣き止んだ。

ふふっ、世界が違っても子供の反応は変わらないんだな。

ジェリーが涙に濡れたまんまるな瞳で、イタズラをした俺を見る。

「おめめ覚めたかな？ こっちにおいで」

手を広げると素直に俺のもとに來た。うん、可愛い。小さな体を抱きこんで、まだしゃくり上げ背中を撫でる。

「怖い夢でも見たかな？ たくさん泣いて疲れたね、お水飲む？」

汗と涙で貼りついた髪を手櫛で整え、出かける前にポケットに入れたハンカチで顔を拭いてやると、ジェリーがコクコクと頷いた。

「マートさんお水……」

ジェリーから視線をマートに移すと、マートは「なにしても泣き止まなかったのに」と苦笑いしながら、すでに手にしていた水を差し出してくれた。

椅子に座りジェリーを膝に乗せると、泣きすぎて真っ赤になった鼻をスンスンとさせながら、俺の持つコップに手を添えてゆっくり水を飲みはじめた。

「ふふっ、上手だね」

一生懸命飲んでる姿が乳児院の子供たちと重なって可愛いなあもう。

——ああ、やっぱり保育士になったかったな。ここでも似た仕事はあるのかな？ あったとして同じように資格とかいるのかな？ 次にギルドへ行ったらお姉さんに聞いてみようか。

考えてるうちにコップが空になって、ジェリーはすっかり落ち着いた。

「じゃあジェリーも泣きやんだことだし、シート取りこんできますね」

落ち着いたジェリーを床に降ろそうとして……あれ、降りない。「やーの！」と言って腕にしがみついて離れなかった。

コアラみたい。ふふっ、チビっ子の反応はどこでも一緒だな。

「おいジェリー、くつついてたらトーヤが仕事できないだろ」

ビートの言うことにも首をぶんぶん横に振って、力いっぱい俺の体にしがみつく。無理に下ろすとまた泣いちゃうなあこれ。

嬉しい反面、出会ってちょっとの俺にこんなに懐いて大丈夫かなとも思う。だけどありがたいこ

とに、不安で一杯だった気持ちの子供体温で癒やされる。

「あの、柔らかい長めの紐とがあります？」

「これでいい？」

突然のお願いにビートが真っ先に傍の棚から取り出してくれたけど、長さが足りていない。

「えっと、できればクラウスさんの背丈くらいの長さのものが」

目安に使ってすみません。

「これはどう？」

「それもちょっと……」

マートが差し出したのは細すぎる。もう少し幅がほしい。

「これならどうだ」

すると、クラウスが例の小さいバッグから俺が欲しい形のものを出してくれた。

「あ、それがいいです！」

クラウスからそれを受け取ると、椅子に立たせたジェリーの脇の下に通して肩に回し背中へ背負った。そう、おんぶ紐だ。

「ジェリー、これならいい？」

肩越しに聞くと、にへっと笑って首にしがみついていた。うん、可愛い。

「じゃあシート取りこんできますね」

よいしょ、と立ち上がると背中ジェリーが「あっち」と指をさす。それに従って厨房の脇を通

り裏木戸から出て辺りをくると見回すと、風にはためくシートが目に入った。

結構あるなあ……持ちきれぬかな？

そう思っていたら、ビートが自分の体半分ぐらいの大きなかごを持って追いかけてきた。

「一緒にやるよ。それからベッドメイクもやんなきゃだし」

「ありがとう。いろいろ教えてね」

「まかせとけ！」

ビートはへつと笑って胸を叩いた。ふふっ頼もしい。

「こっちこそ、ジェリーのことがありがとな。いつもはあんな風に泣くことなんてないし、泣いたとしてもかーちゃんが相手すればすぐ機嫌が直るんだ。でも今日はかーちゃんがないし、全然……泣き止んでくれないし……」

途中から声を震わせながら、ビートはだんだんと下を向いてしまった。

しゃがんで顔を覗きこむと、紺色の瞳がうるうるしてる。

「不安だった？」

「……」

泣くまいと口がへの字になってる。可愛い。

「心配だったかな？」

「……ぜ、全然……泣きやまない、から……どつか、いた、痛いのかって、思ってた……」

ビートは小さな手が赤くなるほど力強く、自分のシャツの裾を掴む。

ようやく吐き出した気持ちにつられて涙が零れないよう必死で我慢してるみたいだ。

「ビートは優しいね」

よしよしと頭を撫で、ぎゅうつと抱きしめた。

いいお兄ちゃんだ。背中のジェリーも手を伸ばしてビートの頭を撫でる。妹からねぎらわれたことで急に照れくさくなったのか、俺のハグから抜け出してしまった。

そうしてビートに教えてもらいながら、シートを取りこみ始めた。

「それにしてもトーヤすげえな。かーちゃんみたいだ」

洗濯紐から外した大きなシートをふたりで一緒に畳んでいると、お褒めの言葉をいただいた。

「そう？ 小さい子たちと一緒に暮らしてたから慣れてるだけだよ」

「兄弟多いのか？」

「兄弟はいないよ」

ちぐはぐな俺の答えに納得がいけないのか、小首をかしげながら「ふーん」とだけ返事をして、それ以上は聞いてこなかった。でも事実だもんね。

取りこんだシートでかごが山盛りになる頃、背中のジェリーがもぞもぞと動きたした。

「降りる？」

「うん」

しゃがんでから紐を解いてゆつくりとジェリーを降ろすと、小さな体で深々とおじぎをした。

「にーちゃ、ありがと」

「どういたしました。淋さみしくなったらまたしてあげるね」

ジェリーは嬉しそうに、にへつと笑う。その様子がほほえましくて、たまらなく可愛いな。

——さあ、背中も軽くなっただし次はベッドメイクだ。

気合を入れて重たいかごを持ちお店に戻ると、お店のカウンターでクラウドとマートがなにやら話していた。会話の邪魔にならないように簡単にお礼を言っただけで借った紐を返しておいた。

よく見たら金糸と銀糸で織られている高級そうな紐だったんだけど、おんぶ紐に使って良かったのか……と心配になった。でも、クラウドは一瞥いちべつしただけで粗雑にバッグに突っ込んだから、心配の必要はなさそうだ。

ベッドメイクをしに行く最中、今日からお世話になるこの宿屋『とまりぎ』についてビートに教えてもらった。

客室は二階にあつて、シングルが二部屋にツインが八部屋。二階に上がるための階段は、正面出入り口に一つあるだけ。

浴室やトイレは共同で、場所は一階正面出入り口から入って右手にあり、食堂とは反対側に位置している。浴室の奥にはリネン庫なんかもあるらしい。

ビートとジェリーの後ろについて最初に入ったのは、十分な広さのある部屋の中に大きなベッドが一つと小さな机と椅子がひと組ある部屋だった。クローゼットはないけれど代わりにいくつものフックが壁に取りつけてある。

部屋の作りはとてもシンプルだけどかえって清潔感があつて、一階と同じように木の温もりを感じる明るい室内ですごく居心地が良さそう。ビートが自慢げに『けっこう繁盛してんだぜ』と言うのも納得だ。

いよいよシーツを交換する時になって、ベッドの大きさに改めてびっくりした。俺が三人くらい余裕で寝られそうだ。この部屋にはクラウドがずっと泊まっているというから体格に合わせた特注なのかと思ったけど、そのあとに入った他の部屋のベッドも同じ大きさだった。

それはさておき、肝心のベッドメイクは「手際がいい」とビートに褒めてもらった。まあシーツ交換は養護施設にいる頃からしょっちゅうやっていたから慣れているもんね。

ベッドを整える間、クラウドの他にも常連の冒険者がいること、客層は旅客と冒険者が半々なんだけどそれは宿屋としては珍しいことなんかをビートが教えてくれた。

食堂も結構繁盛してるみたいだし、宿も食堂も夫婦ふたりで切り盛りしてるのすごすぎる。

俺も頑張らなくっちゃ！

そう決心しながら、ビートと協力して全部屋のベッドメイクを終え、食堂に戻る。

「食堂は昼しか営業してなくて、朝と夜は泊まりの客で飯が必要なやつに用意するだけだから、もうゆっくりしていいぞ」

次の仕事を聞こうとしたらマートにそう言われた。今日やるべきことはジェリーが寝てる間に終わらせていたらしく、明日からは他のこともいろいろ任せてもらえるみたいだ。

ちなみに厨房は全てマートが担当で、買い出しも普段は馴染なじみの商店が配達してくれる分で間

に合うらしい。ただ今日は予定よりお昼のお客さんが多くて食材が不足してしまい、急遽^{きんぐそん}ビートとジェリーがおつかいに出たそうだ。

そのおかげでビートに拾われたんだな。ありがたい。

ほとんどのお客さんは夕飯を外で済ませることが多く、今日も夕飯はクラウスしかないそう。それならとみんなと一緒にテーブルを囲むことになった。

俺の隣にビート、正面はジェリー。ジェリーの隣にはマートが座り、クラウスの席はカウンターに準備されていた。

テーブルの上に並んだのはジャガイモのポタージュ、彩りよく盛られた茹^ゆで野菜のサラダ、それからカッティングボードに焼いたお肉の大きな塊^{かたまり}が一つ。お肉の塊は、マートが包丁をいれると旨味を閉じ込めたおいしそうな断面が現れて、思わずゴクリと喉が鳴った。ローストビーフだ。

「とーちゃん、今日はちよつとだけ豪華だな」

「今夜はとーヤの歓迎会だからな」

マートはお皿の上に一人分には多すぎる量のローストビーフを丁寧に盛りつけ、マッシュポテトを添えて目の前に置くと「さあ召し上がれ」と両手を広げた。

「ありがとうございます。いただきます」

手を合わせる俺の横で、ビートがさつとフォークを手に取りお肉を口いっぱいに頬張る。俺もそれに倣いローストビーフを食べてみた。

柔らかな歯ざわりのお肉は噛むたびに旨味が口いっぱいに広がる。なんだこれ、めちゃくちゃおいしい!!

「うまいだろ」

自信たっぷりになりと笑うマートにコクコク頷いたら、ビートに笑われた。

「とーヤ口に入れすぎだろ」

そもそも一切れが大きいからしょうがないって言いたかったけど、俺がもぐもぐしてるうちにビートはあっさり飲み込んで次のお肉を口に運んでいた。

マートなんかは二枚一緒にパンにのせて、豪快にかぶりついていた。

そうしてわいわい夕食を続け、大きなお肉の塊もすっかり消えてみんなのお皿の上も空になった頃。食後のお茶を飲みながらマートさんに仕事の内容を教えてもらっていたら、ジェリーが大きなあくびをした。

「とーちゃん、ジェリーが眠そうだからシャワー行ってくる」

「助かるよ。待ってろ、着替え用意してくる」

マートが用意した着替えを持ち、ビートはジェリーと手を繋いでシャワーに行った。そのうちに俺たちは後片づけをすることにした。

ちなみにクラウスはこのままカウンターでお酒を飲むみたいだ。

テーブルを拭いて厨房に入ると、オーブンの天板を洗っていたマートが「明日の仕込みをやりたい」と言っって残りの洗い物を任せてくれた。すっかり受け入れてくれたことが嬉しくて改めてお礼

を言うことにした。

「マートさん、得体の知れない僕を雇ってくれて本当にありがとうございます。橋でビートに声をかけてもらえなかったら、今頃こんな風になってなかったと思います」

「なに、ウチも助かるよ。『大丈夫だ』って嫁を実家に帰しといて心配かけさせるわけにはいかなしな。トーヤこそ良かったのか？ 迷子なんて言ってるが、家族が心配しちゃいねえか？」

マートは仕込みの手を止めて俺をじっと見つめる。今までなにも聞かれなかったのは子供たちの前だったからかな。

「僕に家族はいませんし、ここに来るまでひとりで暮らしていました。だから心配する人はいないので大丈夫です。マートさんのところで働かせてもらってる間にこれからどうするか考えてみます。甘えてすみませんが、よろしくお願いします」

「言ったろ？ 困った時はお互い様ってな。ウチも困ってるんだから、トーヤだけが甘えてるんじゃないさ。こっちこそしばらくの間よろしくな」

そう言っただけで俺の頭をぐしゃぐしゃと撫でた。力が強くて首がグネグネするくらいだったけど、小さい頃に養護施設のおじさんが同じようにしてくれたのを思い出して、ちよつとだけ嬉しくなった。

「シャワー空いたよ」

最後のお皿を洗っていると、カウンターからビートとジェリーがひょつこりと顔を出した。パジャマに着替え首からタオルをかけたふたりの髪からは雫がポタポタ零れている。

「わ、こらっビショビショじゃねーか、風邪引くぞー」

「だっていつもはかーちゃんか……」

言わないように気をつけていたのだろう、ビートは慌てて自分の口に両手をあてた。それに気づいたマートもハツとしてジェリーを見たけれど、心配された当の本人はとてと俺のところまで歩いてくると、にこおつと笑って「にーちゃんふいて」と甘えてきた。

「いいよ、ちよつと待っててね」

ジェリーの可愛さにメロメロになりそうだ。

急いで手を拭いてジェリーを抱き上げると、カウンターでお酒を飲んでいるクラウドの邪魔にならないようテーブル席の椅子に座らせる。そして受け取ったタオルで、細く柔らかな髪を傷めないようにトントンと叩くように拭きはじめた。

「あとでビートもやってあげるね」

「俺はいつもこのぐらい自分でやってるからへーきだし」

向かいの席に座るなり俺たちの様子をじっと見てたから声をかけたのだけど、ビートはお兄ちゃんだから子供扱いが嫌だったのか、自分でガシガシと拭きながら口を尖らせた。こっちも可愛い。

「トーヤって昼間も思ってたけど、やっぱりそういうの慣れてるのか？」

そうビートが聞くので「まあね」と答える。思い浮かべたのは、風呂上がりにドライヤーの順番を待つ間、タオルドライしてた養護施設の小さい子たちの顔だった。

そういえばドライヤー、こっちにはないのかな？

ジェリーの細い髪はそれほどかからずにふわふわに乾いた。仕上げにブラシで整えると、いつもの終わりの合図なのか椅子に立ち上がり俺の首にぎゅっとしがみついていた。

どうやら抱っこのおねだりみたい。

望まれるままに抱き上げて「ねんねする？」と聞くと、こくと頷いて体を預けてくる。背中をトントンしながらゆらゆら揺らしていると、すぐに腕の中から寝息が聞こえてきた。確かお昼もそうだったような。

「もう寝ちゃった」

「ジェリーは寝るの早いんだ」

ジェリーの寝顔を覗きこんだビートが優しく笑う。

しばらくそうしていると、仕込みを終えたマートがジェリーを受け取りにきた。

「ありがとな。子供たちを寝かせてくるわ。トーヤももう上がっていいぜ、シャワーも今なら空いてるから使うといい。明日は朝から忙しいからしっかりと眠れよ」

「わかりました。ありがとございます」

「それとこれ、サイズが合うかわからんが、とりあえず明日の着替えに使ってくれ」

そう言っジェリーの代わりに大きな紙袋を俺の腕に乗せてくれた。中を覗くと白いシャツとカーキ色のパンツ、それから下着が二組ずつ入っていた。

「ありがとございます！」

「足りなかったら遠慮なく言ってな。タオルはその奥の部屋にあるから好きに使ってくれたらいい。

い。ああ、それから肝心のトーヤの寝床だが、空いてるシングルを使ってくれ」

「え!? お客さんが使うところじゃないですか、ダメですよ。僕、どこでも寝られるんで物置でも食堂の椅子でも大丈夫です」

これは遠慮でもなんでもない。だってこんなに良くしてもらってるのに、これ以上甘えたらダメだ。

「それもトーヤの稼ぎのうちだからいいんだよ、どうせいつも空いてるしな。それに隣はクラウスだから安全だ」

マートが「なあ」とクラウスに同意を求めたけれど、お酒のグラスを傾ける彼がそれに答えることはなかった。

「とにかく今夜はしっかり寝るこつた。な？」

まるで子供に言い聞かせるようにマートは大きな手でポンポンと俺の頭を叩く。「ありがとございます」とお礼を言うと、さつきみたいにぐしゃぐしゃと撫でられた。

「じゃあな、トーヤ」

「うん、おやすみビート」

小さく手を振って三人を見送ると、カウンターでゆっくりお酒を飲んでいたクラウスがこつちを向いた。

「俺はここにいるから、シャワーが終わったら声かけてくれ」

「あ、はい。わかりました」